ホイ、ホイ、

板壁を蹴らしたりする。

僕は千枚位の長篇小説の構圖を考へたりする樣になつた。

しかし減入つて來て、肩が寒くて、咳をしだしたりすると、僕は自分の過去に於て、大阪へ行つたり東京へ行つたりした事が、みんな自分の生み出した空想なので、自分は三十七になる此の年まで、一度も此のロー屋から出た事はないのだ。

只新聞の記事を讀んだりして、勝手に幻を築き上げてゐたのだ。

ハテ自分の名前は何と云ふのだらう、と思つたりもした。

食欲は段々强くなつて來た。

性欲は依然として閉止の狀態であつた。

朝のまだ暗い五時頃から、巡査達や町の子供等もやつて來て、擊劍や柔道の寒稽古を初める。

竹刀の音に掛聲が混ぢる。

ヤーヤー、サアコイとか言つてゐる。